

## 建設中の東京国際空港 D 滑走路周辺の地下地質 その2 浅部層序と構造

## Geological features around the Tokyo International Airport D runway under construction(Preliminary report 2)

# 細矢 卓志 [1]; 野口 孝俊 [2]; 大里 重人 [3]; 金澤 直人 [1]; 田中 政典 [4]

# Takashi Hosoya[1]; Takatoshi Noguchi[2]; Shigeto Osato[3]; Naoto Kanazawa[1]; Masanori Tanaka[4]

[1] 中央開発 (株); [2] 関東地整・東京空港; [3] 土質 R; [4] 港空研

[1] CKC; [2] Haneda,Ktr,Milt; [3] Doshitsu R; [4] PHRI

本報告は、建設中の東京国際空港 D 滑走路 (以下羽田 D 滑走路) 周辺の地質層序の内、特に七号地層、沖積層について報告するものである。

#### 1. 調査概要

主な分析項目は、14C 年代測定、貝化石、火山灰の屈折率、ナンノ化石、有孔虫、貝形虫である。なお、設計用ボーリングで採取された試料を使用しているため、精度は 1~2 m 程度となっている。

#### 2. 層序

##### 2.1 七号地層

七号地層は、AP-45 m ~ AP-70 m 付近を構成し、層厚は 20~30 m 程度である。一部泥質の谷埋が確認されるほかは砂泥互層を特徴とする。サンドパイプはほとんど確認されない。

本層の基底は、多摩川方向に緩く傾斜しているものの BG 層は確認されていない。

また AP-52m 付近において認められたスコリアは、層厚 1cm、直径 1 mm、スコリアのみの純層で、埋没段丘礫層の層位や周辺の年代測定結果の関係から古富士起源と考えられる。今後羽田付近の層序対比を行う際の鍵となる可能性がある。

##### 2.2 有楽町層

有楽町層は、海底面からおよそ 20 m を構成し、AP-41.5m 付近からはカキ礁の密集層が認められる。このカキ礁の 14 C 年代測定結果は、C 滑走路侵入灯橋梁付近で報告されている関本ほか (2008) のカキ礁の年代とほぼ同様な年代であり、カキ礁の分布はゆるく D 滑走路側に傾斜していることが確認される。

また AP-39.60m にはハボウキガイ科やニッコウガイ科等の湾奥部の泥質平坦地に生息する貝類が確認される。サンドパイプなどの生痕が多く確認される。

#### 3. 堆積環境

AP-39.60 m 付近で認められた貝殻 (Pinnidae, Tellnidae) は、N 1 正浅海帯に棲息し、AP-41.5m 付近で確認されているカキ礁とは生息環境大きくことなる。つまり、AP-40 m 付近から急激に水深が増加し、環境が大きく変化したことが示唆される。

#### 謝辞

本発表をまとめるに当たって、日本大学文理学部地球システム科学科遠藤邦彦教授には、終始有益な御意見をいただいた。御礼を申し上げます。

#### 参考・引用文献

- 1) 岡重文, 菊地隆男, 桂島茂 (1984): 東京西南部地域の地質, 地域地質研究報告 (5 万分の 1 地質図幅), 地質調査所.
- 2) 東京都港湾局 (2001): 「新版 東京港地盤図」
- 3) 関本ほか (2008), 東京湾北西部域, 東京国際空港 (羽田) 付近の沖積層と古環境, 日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」
- 4) 国土交通省 (2004), 羽田空港再拡張事業公告資料 (<http://www.pa.ktr.mlit.go.jp/kyoku/saikakutyou/main2.htm>)
- 5) 大里ほか (2008), 建設中の東京国際空港 D 滑走路周辺の地下地質 その 1, 日本地球惑星科学連合予稿集
- 6) 金澤ほか (2008), 建設中の東京国際空港 D 滑走路周辺の地下地質 その 3, 日本地球惑星科学連合予稿集